
GS - GANTZ STRATS

カルボナーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GS - GANTZ STRATS

【Zコード】

Z9865X

【作者名】

カルボナーラ

【あらすじ】

GANTZのミッション中に死んだ主人公が、ISの世界に転生する。それだけ。作者は小説を書くのが初めてです。不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などありましたらお願いします

Prōlogue (前書き)

初めまして。カルボナーラと申します。

初めての投稿なのでいたらないところもありますが、よろしくお願いします

また、不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などありましたらお願いします

Prologue

とあるマンションの一室

そこには死んだはずの人間が集められ、「ガンツ」と呼ばれる黒い球体からミニッションが『えられる

それは、星人を殺すこと

プロローグ

俺は闘つてきた

生き残るため

ただそれだけのために

あの日、俺は死んだはずだった

俺はただベッドの上でただ時間が過ぎるのを待つていた
動かすことの出来ない手足、しゃべることの出来ない口、痛みさえ
感じない身体

いつしか俺は死を望んだ

何もすることの出来ない身体、生きているといつ実感すら存在しない日々
俺の心は壊れていった

以前は友達もいた

恋人もいた

生きていることが当たり前

こんな日々が続くのが当たり前

そう思つていた

でも今は自分さえいなくなつた

やがて俺は死んだ

あの日、俺は死ぬことが出来た

俺の名は橘修也。

元ガンツによつて集められたガンツメンバーだ。
そう、「元」だ。

今の俺は……

「修ちゃん、ミルクのおじかんでちゅよ~」

「あう~」

赤ん坊だ。

俺はガンツのミッション中に死んだはずだった。

壊れかけのガンツによつて転送された先で俺の目に映つたのは、かわいらしい天使の石像たちが、その顔に笑みを浮かべながら、嬉々として人間の腕、足、首をもいでいく光景だった。

ローマの街が、多くのミッションを生き抜いてきた猛者たちの血で赤く染まっていた。

そんな地獄のようなミッションが終わり、転送が始まったとき、俺は左半身をじつそり失い、無様に横たわっていた。

俺が闘つていたのは、俺を憎悪でゆがんだ顔を向けている、ボスであるう巨大なダヴィデ像だつた。

俺は捨て身の特攻でダヴィデ像の腕を奪うことに成功した。だが、捨て身であったがゆえに、ダヴィデ像の目から放たれた光線をよけきることが出来る筈もなく、左半身を失つた。

そんな俺を食べようとダヴィデ像は頭を近づけてきた。

俺は痛みで狂いそうになるのをこらえながら、右手に持つていたガソリソードを伸ばした。

そしてそれは、Xガン、果てはZガンさえ効かないダヴィデ像の、数少ない弱点であつた日に突き刺さり、そのまま脳をも貫いた。

だが俺は田を押さえながら倒れていくダヴィデ像を見ることはなかつた。

俺はこのとき、死んだ。

気がつけば死んだはずの俺は、赤ん坊になっていた。

どうしてこなつた

赤ん坊になつてから一年が過ぎた。

精神年齢が18歳となつた今でも、とても憂鬱だった。

今ではたしかに慣れてきたし、歩けるようになったのももう遠くはないだろうから、かなりましまではあったが。

- - - - -

ガンツに集められるよりも前、12歳の頃、俺は重病を患つた。

その病氣のせいで、俺の身体は動かなくなつた。

二三九

ただ時間がすぎるのを感じるだけの日々。生きたいという望みさえ次第に失つていつた。

こんな生きている実感さえない日々は、唐突に終わった。

目に光が、耳に音が、身体に自由が戻ってきた。

そんな俺の目がとらえたのは、何もないマンショニ一室で、唯一、異様な存在感を示す黒い巨大な球体。

これが俺とガンツの出会いであり、生きる意味を見つけた瞬間だった。

- - - - -

二度も身体を動かせない辛さを味わう日にあつた俺は、中身は18歳であるにもかかわらず、ハイハイ出来るようになつた日には、喜びのあまりハイハイしすぎて、生まれて一年で筋肉痛になり、情けないのか、逆にすごいのか、なんともいえない気分だった。

ともかく、ハイハイが出来るようになり、行動範囲の広がった俺は、身の周りの情報を集めた。

その結果わかつたことと、今までの情報を重要なものでまとめる俺の名前は以前と同じ橋修也であるということ。

両親の名前は以前と違い、母親が橋美穂から橋晶、父親が橋良弘から橋洋一になつていて見た目も違つたこと。

ここは日本だが、俺の知らない県名であるということ。

そして、俺の誕生日があのミッションがあつた日と同じであるということ。

これら情報から考えると俺はどうやら人生が振り出しに戻つたのではなく、死んだと同時に生まれ変わったということだろう。なぜなのかは全く見当もつかないが。

だが俺はこの考えに到つたとき、理由なんかどうでもいいと思つぽ
どの喜びを感じた。

なにせ、俺は病氣を患つたせいでの、まともな生活をしたことがなか
つた。

だから生まれ変わったのなら、新しい人生を普通に生きることが出
来る、やることが出来なかつたことがやれる。

そういうつた未知への期待が俺にこんなにも喜びを与えた。

その日は一日中興奮していたため、次の日は母親が心配するほどね
むりこけた。

ただその顔はとても微笑ましいものだった

1話（後書き）

不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などあればお問い合わせ下さい。

2話

転生してから6年、俺の日常は、出会いと再会によつて、大きく歪む事になる。

「おひちしぶりだす しゅうやん 元気にしてやがりましだか？」
「元気にしてたよ、少なくとも昨日まではね…」

小さくなつた黒い球体が俺の前に現れたとき

「ガンツ」

俺の世界は大きく歪んでいく

転生してから6年がたつた。

早いことに、もうすぐ小学一年生だ。

えっ？ 時間が飛びすぎだつて？

…この五年間はいろいろあつたから、まとめて説明する。

2歳になるまで、俺は何の問題もなく暮らしていた。

そんな何の変哲もないが十分に充実した日々が壊れ始めるのに、時間はかからなかつた。

両親関係が険悪になつたのだ。

夜中に聞こえてくる怒鳴り声から、原因は育児に対する考え方の食い違いのようだつた。

父親は育児は女がするものだと主張し、母親は一人で育てていきたいと主張していた。

そんな関係が長続きするはずもなく、母親は俺を連れて家を出て、母親の実家に逃げた。

昼間は明るく振舞つていた母親は、俺を寝かせたと思うと、声を殺して泣いていた。

俺に弱弱しく、何度も何度も謝つっていた。

母親の実家は、児童養護施設を運営していた。

実家に来てから、母親は働き始めたが、幼稚園に行かせるだけのお金が足りなかつたため、俺はよく施設に預けられた。

施設では、幼稚園には行かず、小学校からという決まりらしく、俺

と同じ年の子が5人いた。

はじめは、子供に混ざつて遊ぶといふことに対し、正直遠慮した
かつたが、諦めて混ざつてみると、思いに他、すぐに慣れた。

一度目の生で身体を動かせない苦しみを知っていたから、身体を自由に動かして遊ぶだけでも、人一倍喜びや楽しさを感じられたから
だろう。

だが、施設での一番の楽しみは本を読むことだ。

施設には、18歳までの子供がいる。

そのため、施設にある小さな蔵書部屋には、絵本から、大学の入試問題集まで様々な本があった。

転生する前の世界では、俺は戸籍上死んだことになっていた。
だから学校に行くことも出来ず、制服を着ている学生を羨むような視線で見ていたことが多々あった。

だから本を読んで知識をつけることが楽しくて仕方がなかった。
そうしているうちに、俺は段々と浮いた存在になっていた。
あまり外で遊ばず、本を読み漁っているような子に、誰が話しかけるだろうか。

ゆえにこの結果は当然であり、後悔もしていない。

今思えば、もっと人付き合いに積極的でもよかつたかなと思わない
でもないが、この五年間のうち、施設に入つてからの俺は、十分に充実していた。

冒頭に戻り、俺はもうすぐ一年生だ。

俺と同じ年のやつらは、学校に行くのが待ちきれず、ランドセルを

背負つてはしゃいでいる。

入学式の日、俺たちは施設の責任者である俺の祖父に連れられ、学校まで行き、校門で記念写真を撮つた。

その後、生徒は一度教室に集合しなければならぬいらしく、俺たちはそれぞれの教室へ向かつた。

教室を一通り見回してみたが、知つてゐる顔はひとつもなかつた。まあ当然か、などと自己解決していると、教室に先生が入つてきた。40代と思しき女性の先生は、軽く自己紹介を済ませると、生徒をうまくまとめながら体育館に誘導していく。

入学式が始まり、順番に体育館に入場していく。

そのとき、カメラをこちらに向けている親の中に、母親の姿はなかつた。

仕事で仕方がないとはいゝ、少しだけ寂しくなつた。

そんな寂しさを引き飛ばすほど眠くなる校長の話が終わり、入学式は閉会した。

その後は教室で自己紹介の時間になつた。

このとき俺は、6年ぶりにこの世界がどこかといつ問題にぶち当たるとは、少しも考えていなかつた。

「それでは皆さん、今から自己紹介をしてもらいます。呼ばれたら、自分の苗字と名前と年、あとは言いたいことがあつたら自分の好きなように言ってください。じゃあ最初は安藤君からね。はい、安藤君。」

「はーい。えと、あんどうけいすけ、6さいです！好きな食べ物は……」

こつこつして始まつた自己紹介は何の問題もなく終わると思つていた。

………… よろしくおねがいしますー。」

「はい、ありがとうございます。」

パチパチ パチパチ

「ここまでは問題はなかつた。問題は次に自己紹介したこいつ…

「はいーおひむらこちからせこですーえつと… よろしくおねがいしますー！」

こいつが織斑一夏だということだ。

……ちょっと待てー！ おかしいだろ、おいー！

今までおかしい事だらけだったが、今回ほどおかしかつたことはないぞ！？

百歩、いや千歩譲つてガンツのミッション中に死んだら、赤ん坊になつて人生をやり直すことになつたとしても認めよう。

だがー！ ガンツのミッション中に死んだら、ラノベの世界に赤ん坊になつて人生をやり直すことになつていたなんて事実を、認められるかー！！

ふざけなよー！ ガンツウウウウウウツーーーー！

………… とりあえず落ち着くべきだ。

焦つていては、見えるはずのものまで見えなくなつてしまつ。

そうだ素数を数えよ…

「はい、じゃあ次は橘君」

「はは、はいっ！って、うわっ！？」

今まさに素数を数え始めようとしていた俺は、突然呼ばれた名前に反応し、咄嗟に返事をし、立ち上がるまではよかったです。

が、焦りに焦つていた俺は、足がもつれて、左に倒れてしまった

「いって～」

「あっ、だいじょうぶ？」

「あ、ああ、大丈夫」

「ほんとに？はい、つかまって」

そう言つて起き上がるやつとした俺に手を出してくれたのは、左に座っていた、髪をポニー テールにしたかわいい女の子だった。名前は、…聞いていなかつたが想像がついてしまつた。

「助かった、ありがとう。えっと、篠ノ乃さん、だよね？」

「そうだよ。しののの まつきだよ、よろしくね。」

どうやらこの世界にも神なんかいないようだ。
いたとしても絶対に信じない。

俺が転生してから6年、一つの大きな問題が解決された。
俺が今生きている世界は、… ISの世界だ

帰りは母親が迎えに来ていた。

俺は母親に手を引かれながら、歩いていたが、ほんの少し前に知った事実の衝撃で、妙に疲れていた。

そのせいで、俺はほとんどしゃべらずなかつたようだ、途中で母親に「今日は行けなくて」「めんなさい」と謝られてしまった。そのあとは、これ以上余計な心配はかけるまいと、しゃべり続けた。施設に帰り着くと、母親は再び仕事に戻つていった。

どつと疲れていた俺は、蔵書部屋には田もくれず、自室へと向かった。

そして俺は再会した。

お下がりの俺の机に乗つている、黒い球体。

忘れもしない、俺に自由を与えて、俺に生きる意味を与え、俺に一度も死を与えては生き返らせた黒い球体。

小さくなつてもなお、その異様な存在感を放つ黒い球体。

ガンツが再び俺を見つめていた。

「おひちしぶりだす しゅうやん 元気にしてやがりましだか？」
「元気にしてたよ、少なくとも昨日まではね、ガンツ」

ガンツは再び俺の前に現れた。

2話（後書き）

不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などあればお問い合わせ下さい

3話

ガンツと再会した俺は、ガンツにあのミッションの後、俺がどうなつたのかを知らされた。

まず、なぜ俺が赤ん坊になっていたか。
原因はわかつたが、どの半分は俺の責任でもあつた。
どうやら俺は、転送途中に死んだらしい。

そのせいで、死んでいる部分は転送できず、また、ガンツも故障していたため、生きている部分だけでしか身体を作りなおせなかつたらしい。

その結果、俺の身体は赤ん坊になり、母親の子宮に転送されたというわけだ。

そしてもうひとつ、なぜ転送された世界がISの世界なのかについてだが、これも俺が転送中に死んだことが原因らしい。

生きている部分を作り直しながら、かつ転送先を子宮にでなければならなくなり、これを故障中のガンツが行うには無理があつたようで、転送がおざなりになり、偶然転送された先がISの世界だったところなのだ。

「こんな感ずで 理解しやがりますだか？」

「ああ、理解した。お前のおかげであり、お前のせいだつてことがよくわかつた。」

ガンツの説明でやつと自分の境遇を理解した俺は、昔の自分からは考えられないほど安心していた。

かつて死にさえ恐怖を感じなかつた俺が、心のどこかで不安を感じていたという事実に、情けなさとあきれを覚えながらも、不安を感じていた自分に納得し、不安を感じれたことが嬉しかつた。

死を恐怖しない人間。

それはもう死ぬことのない死人だけだ。

ゆえに死を恐怖できる。

それは俺が普通の人間に戻ることができたといつことの証明に他ならないのだから。

だが新たな問題も生まれた。

それは

「もう一度と見ないだろ?と思つていたが、また随分とあつさり予想が外れたな」

俺を魅了してやまなかつた力が、俺の手に戻つてきたのだ。

俺はガンツに集められてから、初めて生きる意味を見つけた。
それは星人を殺すことだった。

自分の身体が動かせるようになつて、最初にやつたことこそ、星人を殺すことだつた。

はじめは怖かつた。

すぐ近くに存在する死への恐怖と、動けるようになったのに死にたくないという願望に突き動かされ、銃を持ち、星人を殺した。何度目かのミッションで生き残ることが出来たとき、俺は死への恐怖ではなく、死へのスリルを感じていることに気がついた。

いつしか、俺はこのゲームを楽しんでいたのだ。
そんな自分が怖くなつた。

だがそんな恐怖さえ、すぐに消えていった。

なぜなら、動くことさえ出来なかつた俺が、ガンツースーツの超人的な力で強者である星人を殺す。

そんなことまで出来るようになつた自分に、ただただ狂喜していたからだ。

一度ゲームが始まれば、俺はそれを楽しんでいた。

そんなことを繰り返すうちに、俺は7回目の100点を取つた。

それでも、このゲームから抜け出したいとは思わなかつた。

殺しあうことに楽しみを感じ、その楽しみを失いたくなかった

それ以上に、このゲームから抜け出したら、また自由も、生きる意

味も失つてしまつのではないかという恐怖。

こんな俺に残つた、唯一の恐怖が、俺をゲームに縛り続けていた。

俺は、スーツの感触、武器の重さ、冷たさを感じるうちに、昔のように闘いたいという、歪んだ欲望が芽生えてくるのがわかつた。そんな自分に吐き気がした。

俺は縛りのない身体の自由を持つている。

でも俺は闘いを望んでいた。

死がすぐそばに存在する闘いをだ。

結局、俺は変われてなどいなかつたのだと。

変わつた気になつていただけに過ぎなかつたのだと。

ほんの数刻前に感じた嬉しさは、所詮まがい物の上に作られた虚像に過ぎなかつたのだと。

俺はトイレに駆け込むと同時に、盛大に膣の中のものをぶちまけた。

一度出た涙は止まらなかつた。

悔しくてたまらなかつた。

この世界に転生して、出来なかつたことが出来て喜んだ。

施設での生活は好きだつた。

母親が入学式に来なかつたことを寂しいと感じた。

でも全部まがい物だつた。

俺の生きる意味は、何も変わっていなかつた。

俺は力任せに壁を殴つた。

どうにかして氣を紛らわせたかつた。

でも小さな身体では、自分に傷をつけることも出来ず、それが、俺には何も出来ないと言われているようで、悔しくなり、何度も壁を殴つた。

やがて殴る氣力を失くした俺は、その場で氣を失つた。

目が覚めると、そこは俺の部屋だつた。
服も別のものになつっていた。

どうやらゲロと血で悲惨なことになつていた俺は、洗われた後、この部屋に運ばれたらしい。

いまだに残る吐き気と、こぶしの痛みが、意識を覚醒させていぐ。
意識が覚醒した俺は、氣を失う前のことを思い出す。

その瞬間、再び吐き気が俺を襲つ。

耐えられなくなつた俺は、そばに用意されていた洗面器に、胃の中のものを再びぶちまけた。

ようやく出し終えたとき、か細いノックと共に、母親が入ってきた。

母親の目は真つ赤で、頬には涙の跡がくつきりと残つていた。

母親は俺の意識が戻つていてことに気がつくと、俺を抱きしめた。

「修也…、『めんなさい… ほんとう』……『めんなさい』」

母親は俺に消え入りそうな声で謝つていた。

違う、母さんのせいじゃない。

そう思つても、行き場のなかつた俺の感情は、理不尽な怒りを感じずにはいられなかつた。

「なんでなんだよ… なんで俺はこんなに苦しまないといけないんだよ… なんで普通の幸せさえ俺にはないんだよ… なんで俺は普通の人間になれないんだよ…」

こんな理不尽な俺の言葉を、母親は静かに聴いてくれた。

「死んでやつとつて、違う人間として、違う人生を、普通に過ごせると思つたのに…」

「死んでやつとつて、修也、あなた… 死んだことが…」

自分の言つてしまつた言葉に気がつき、頭が一気にクリアになつた。もう、後戻りは出来ない。

「やうだよ……俺は死んだことがある。そして死ぬ前のことも覚えてる。」

「やうなのね……通りで小さい頃から全然泣かなかつたわけだわ。」

「そんな簡単に信じられるの？　それに信じつて事は、自分の子供じゃないつて認めるつことなんだよ？」

酷いことを聞いている自覚はあつた。

しかし母親は凜とした声でこれを否定した。

「それは違うわ。」

母親の抱きしめる力が少しだけ強くなつた。

「あなたは私がおなかをいためて生んだ子よ。それは絶対に変わらない。」

「なんでそんなこと言えるの？　俺には死ぬ前の世界には俺を生んだ母さんじゃない母親がいるんだよ？」

「そう、それも事実だわ。でもね、死ぬ前の世界にあなたを生んだ

母親がこるよつて、この世界でもあなたを生んだ母親はこるのよ

「どうやら母親は、俺が思っていた以上に、強い人だつたらしい。

「俺は…母さんの子供でいいのかな？」

「当然よ。それにあなたが否定したとしても、あなたは私の子なのよ。」

「そうだったね… ありがとう… 母さん。少し、泣いてもいい?」

「ええ、いいわよ。」

俺は、感情のままに思いつきり泣いた

そのあと俺は、全部を話した。

12歳の頃に病気になり、それが原因で死んだこと。
そうしたらガンツに集められたこと。

ガンツとは何か。

ガンツのミッションで俺がしてきたこと。

ガンツのミッション中に死んだのが原因でこの世界に来たこと。

俺が気を失う前に何があったのか。

俺に関わることすべてを話した。

話し終えた俺は、やつと変わることが出来た。

「人はいくつもの自分を持つている。そしてそのどれもがその人自身から生まれたもので、その人自身を表しているのよ。だから、今あなたがまがい物だと思っているものを、現実だと感じていた過去のあなたも、あなたから生まれた、あなた自身なのよ。そしてその自分自身を受け入れることが出来たとき、あなたは変われるはずよ。」

母がそう教えてくれたから。

俺はもう、変わることが出来た

3話（後書き）

不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などありましたら、お願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9865x/>

GS - GANTZ STRATS

2011年10月30日01時16分発行